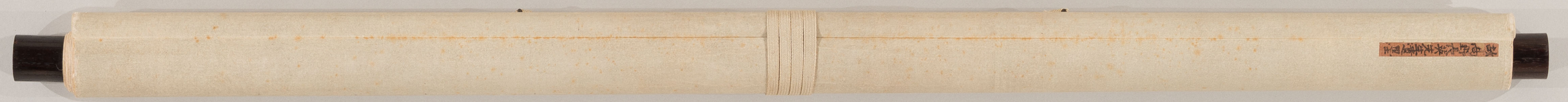
遺
43

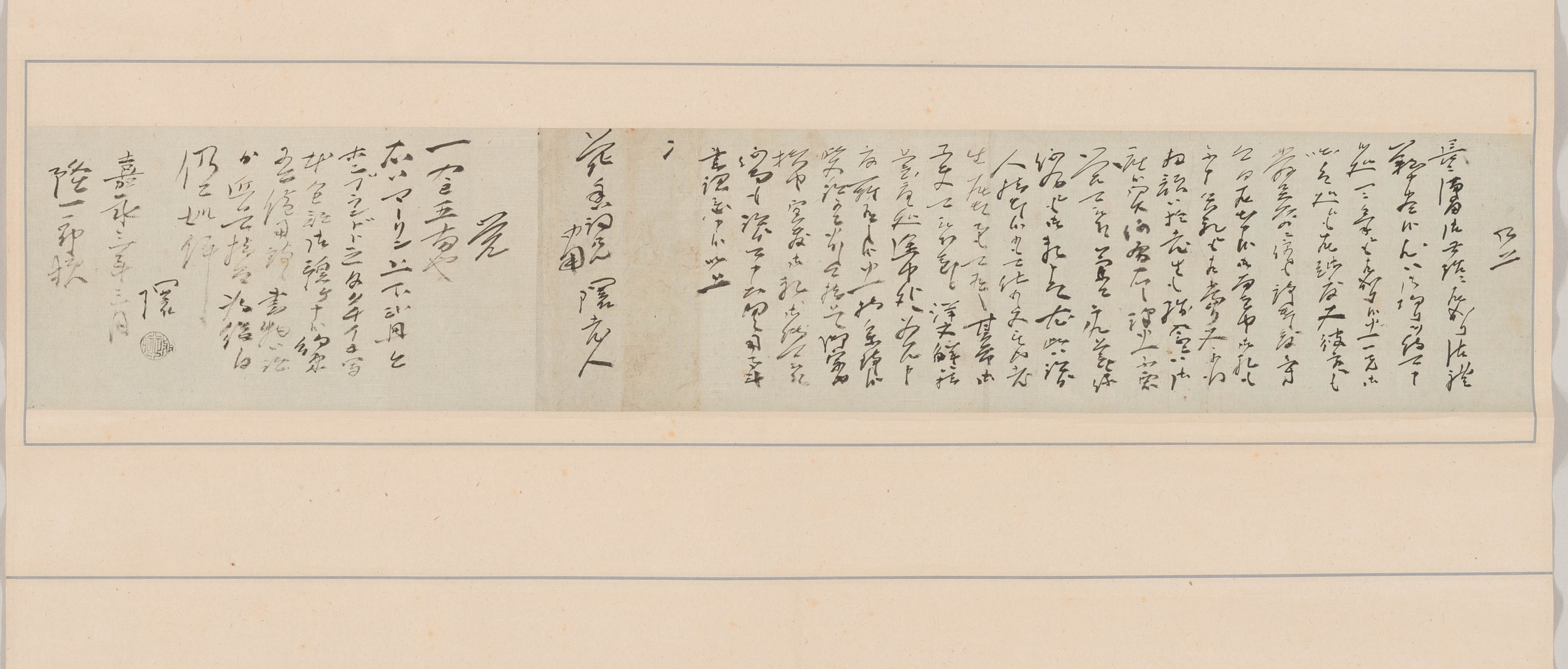
高野長英
尺牘



高聖長英先生實踐
花香隆一郎宗匠







口上

長々滞留御世話ニ罷成(マカリ)り御礼難(ナンギ)申尽候、然ハ御帰リヲ待兼申候処、天気も相成り候ハヽ一先(ヒトマヅ)御咄(ハナシ)申候処ニも罷越(マカリコシ)度又彼方(アチラ)へも発足以前ニ便りも致遣(イタシヤリ)度存(ゾンジ)候ニ付(ツキ)、今日罷帰(マカリカヘ)り出申候、御留守中御礼も不申、失礼も相当リ又不得(エ)拝顔ハ於(オイ)老生(ワレ)も残念ニ御座候得共、何分右之譯ニ而不悪御含(オフクミ)可被下候、兼而願上置候儀何分(ナニブン)も御頼申上候、尤此(コノ)咄(ハナシ)より人指出し候ことも可在(アル)もし又其内老生罷出候事も可有候、其節御工夫(クフウ)可被下置(クダサルベク)候、洋文解ハ指上置度候処、途中外ニ為(タメ)見申度所有之候ハヽ持参致し候、此又咄(ハナシ)にてハなるく可指上候御家内様中へ宜敷御礼御傳(ツタヘ)可被下候、何事も跡より可申上(モウシアグベク)候ニ付(ツキ)用事書認置申候、以上

花香詞兄　　環老人

内用

覚(オボエ)

一金五両也

右ハマーリン上下二冊今ホンブランドと云(イフ)タクチイキ写本全部御預ケ申候約束にて借用致(イタシ)候、書物ハ跡より近日可指上候ニ付(ツキ)、為後日仍テ如件(クダンノゴトシ)

環(墨印)

嘉永三年三月

隆一郎様

これは長英先生が晩年の門人の千葉県香取郡萬歳村の篤志家(あて名に詞兄としてある)花香隆一郎に名残惜しさに書き送ったもの、先生は天保十年(一八三九)入獄後、六年目、弘化元年六月、獄舎大災の為め放たれ帰るべき様諭されておったのを帰らず(脱獄の罪に相当)して各地を潜行、一郷里水沢に帰って老母を省しその後しばらく江戸市中、それから四国の宇和島更に九州に渡り鹿児島まで潜行を続け、その間密かに蕃主以下の庇護を受け一門人を教え著述、翻訳に従事し次いで名古屋から嘉永二年(一八七九)八月、面貌を変じて江戸に入り翌年即ち同三年初め頃、この状に出てある千葉萬歳村に来て花香方にかくまわれ、三月に江戸に入り、沢三伯の変名で門人宮城の世話で青山百人町(今の南青山六丁目)に医を開業したのである、ところが、学資金目あての蕃府(ママ)からの手先役人に見破られ、十月晦日の夜非業の最後となった

この状は先生の現在伝はる最後の筆蹟だらうと思はれる、借金証中のタクチイキは兵法書、三兵(歩、騎、砲)タクチキで原書は独逸書、それの蘭訳書を先生が飜訳した即ち邦訳書である

花香恭法は明治三十一年死しこの状はその孫花香伝右エ門から研医会の有に帰したもの、先生の畜孫高野長運氏はこの状を長英伝(昭和十五、岩波発行)の六三三頁及び長英全集才四巻巻末に写真版として引用説明してある

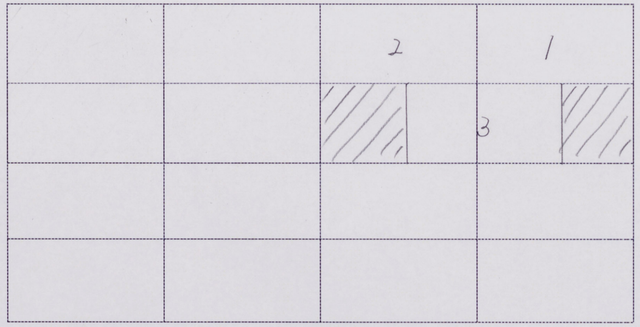
昭和四十一年十二月十日(土)夜、青山善光寺の先生碑陰幕の前夜、水舎敬志

分割撮影記録票

コレクションコード：

文献コード：KNIK－000239

文献内画像連番：00012　00013　00014



記入方法：分割したコマ数を実線で囲い、その枠内に撮影した順番を記入する。

口上

長々滞留御世話ニ罷成(マカリ)御礼難ニ申尽一候、然ハ御帰リヲ待兼申候処、天気ニも相成リ候ヘ(ツ)一先御暇(イトマ)申候処ニも罷越(マカリ)度又彼方へも参(マイ)度存(ゾン)候間、取急キ以書(シヨ)中(チユウ)申上候、尚又今日面談(ダン)出(デ)申候、御留守中御礼も不申、失礼ニも相当リ又不得(ザルハ)拝顔ニ於(テ)ハ老生(セイ)も残念ニ御座候得共、何分右之訳ヲ(不悪御会(カイ)可被下候、兼テ願上置(オク)候儀何分(フン)も御頼申上候、尤此ハ跡より人指出し候ことも可仕もし又其内老生罷出(デ)候事も可有候、其節御工夫(クフウ)可被下置(カル)様中ヘ宜敷(ヨロシク)御礼御傳可被下候、以上

花香詞兄

内用

環老人

何事も跡より可申上(マウシアグ)処ニ候へ共、取紛書認置申候、以上

これは長英先生が晩年の筆蹟を人(あて名に記法にあてたもの、先生目、仏化元年六月獄様諭されておつたのを各地を潜行し一郷里しばらく江戸市中、に渡り麻布島まで藩主以下の庇護を訳よ従事し次いで名月、面貌を変じて江戸頃、この状に出てゐるくまわれ、三月に江戸城の世話で青山百人業したのである、ところの手先従人に見破られとなつた

この状は先生の現在はゐる、借金証中一カ所)タクチキで原書は度所有之候中へ持参致し候、が飜訳した即ち邦此又跡にてゆるく可指上候御家内様中へ宜敷御礼御傳可被下候、花香恭法は明治三十一年エ門から研医会の有長運氏はこの状を、長三頁及び長英全集引用説明してゐる昭和四十一年十二月十日

人指出し候ことも可仕もし又其内老
生罷出候事も可有候、其節御
工夫可被下置洋文解ハ指
上置度候処、途中外ニ為見申
度所有之候ハヽ持参致し候、
此又跡にてもよく可申上候御家内
様中へ宜敷御礼御傳へ可被下候、
何事も跡より可申上匆々不尽
書認置申候、以上

花香詞兄　　環老人
内用

覚

一金五両也
右ハマーリン上下二冊今
ホンブランドと云タクチイキ写
本全部御預ケ申候約束
にて借用致候、書物ハ跡
より近日可指上候、為後日
仍テ如件

環（黒印）

嘉永三年三月
隆一郎様

目、仏化元年六月、獄
様諭されておったのち
各地を潜行し郷里
しばらく江戸市中、そ
に渡り麻布島まで
藩主以下の庇護を
訳よ従事し次いで
月、面貌を変じて江
頃、この状に出てお
くまわれ、三月に江戸
城の世話で青山百人
業したのである、とこ
の手先従人に見破ら
となった
この状は先生の現在
はいる、借金証中一の
砲）タクチキで原書は
が飜訳した即ち邦
花香恭法は明治三十一
エ門から研医会の有
長運氏はこの状を、長
三頁及び長英全集
引用説明してお
昭和四十一年十二月十
除幕の前夜、川舎

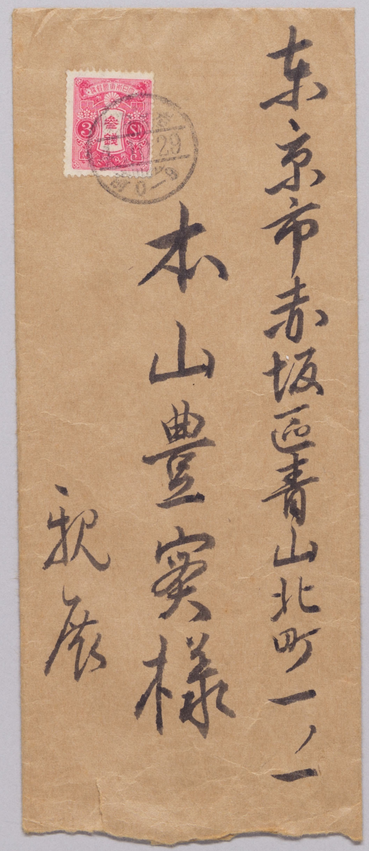
…御(ゾ)…
…度又彼方(へ)も…
…度(シ)…度(シ)…
…留守中御礼(ルス)も
…不レ得(ザルハ)ニ
…残念ニ(ハ)御
…願上(イ)ケ置候儀
…候、尤(モ)此(ノ)跡(ヨリ)
…往もし又其内老
…有候、其節御
…文解(ハ)指
…外ニ為(モ)見申
…持参致し候、
…候御家内
…可被下候、
…申上候以上
環老人

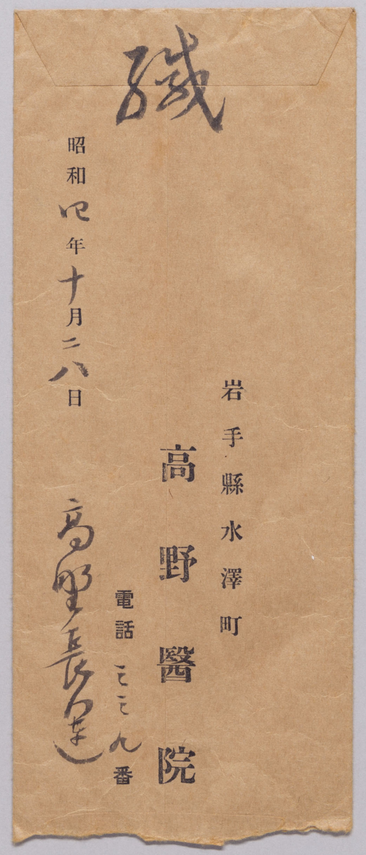
これは長英先生が晩年の門人の千葉県香取郡萬歳村の篤志ある人（あて名に詞兄としてある）花香隆一郎名忝法にあてたもの、先生は天保十年（一八三九）入獄後、六年目、弘化元年六月、獄舎大災の為め放たれ帰るべき様論されておったのを帰らず（脱獄の罪に相当）して各地を潜行―郷里水沢に帰って老母を省しその後しばらく江戸市中、それから四国の宇和島更に九州に渡り鹿児島まで潜行を続け、その間、密かに藩主以下の庇護を受け一門人を教え、著述、翻訳に従事し次いで名古屋から嘉永二年（一八七九）八月、面貌を変じて江戸に入り翌年即ち同三年初め頃、この状に出でる千葉萬歳村に来て花香方にかくまわれ、三月に江戸に入り、沢三伯の変名で門人宮城の世話で青山百人町（今の南青山六丁目）に医を開業したのである、ところが、貴金目あての暴漢らの手先殺人に見破られ、十月晦日の夜、非業の最後となった

この状は先生の現在伝はる最後の筆蹟だらうと思はれる、借金云々中一の夕ケチイキは兵法書、三兵（歩、騎、砲）タクチキで原書は独逸書、それの蘭訳書を先生が翻訳した即ち邦訳書である

花香恭法は明治三十一年死―この状はその孫、花香伝右エ門から研医会の有に帰したもの、先生の曾孫高野長運氏はこの状を、長英伝（昭和十五、岩波発行）の六二三頁及び長英全集才四巻巻末に写真版として引用説明してある

昭和四十一年十二月十日（土）夜、青山善光寺の先生碑陰墓の前夜、川崎敬志―


東京市赤坂區青山北町一ノ一
本山豊實様


岩手縣水澤町
高野醫院
電話ここん番
昭和卄年十月二八日

No. 1

瑞皐堂高野醫院

昭和　年　月　日

お貸

[illegible]
の七美尺候は至急を要せ[illegible]
若干発生美術事業振興[illegible]
お受けなく入札はみなみなお[illegible]
若四拾弐部を合冊とし判行する[illegible]
[illegible]
みを以ておさまき幅と照等くらいの実章と
一人金弐百拾円也　長美尺候入札金
右入札候条当委託[illegible]
札おもむくも出張[illegible]

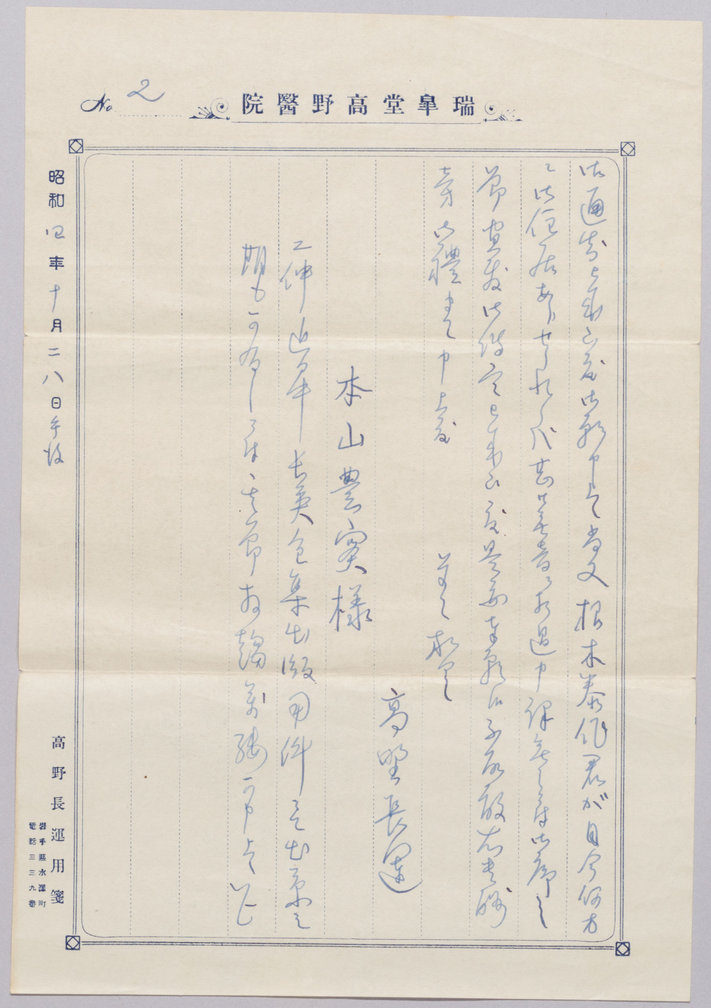
高野長迎用箋

群手県水沢町
電話三三九番

No 2

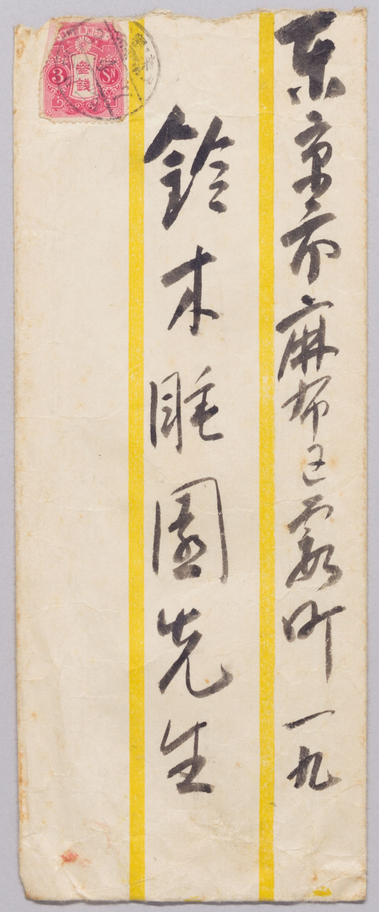
瑞皐堂高野醫院

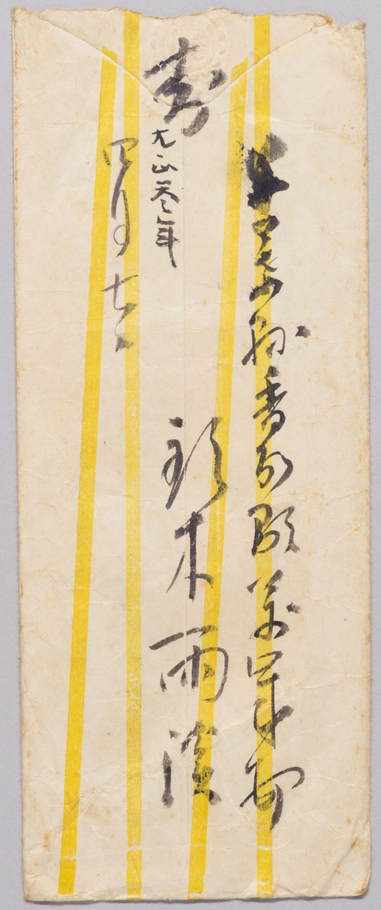
昭和12年十月二八日午後



高野長運用箋

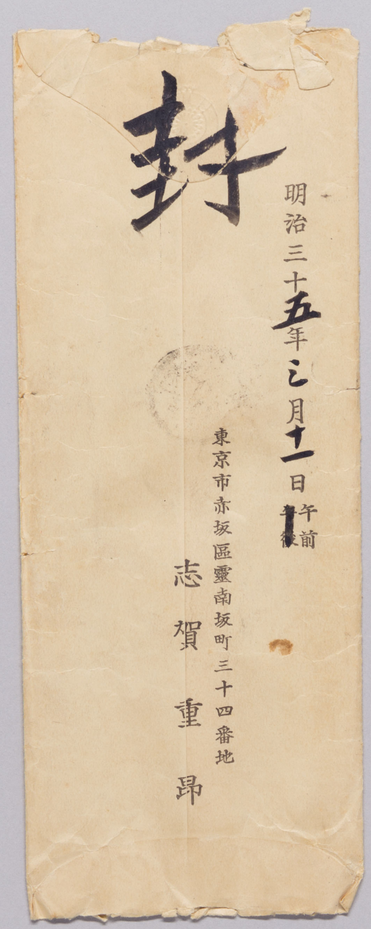
揮毫 東京市麻布区本蓮町 電話三三九番





千葉縣香取郡萬歲村

花香傳右衛門殿


封

明治三十五年七月十一日午前
後

東京市赤坂區靈南坂町三十四番地

志賀重昂

謹啓過般御地方へ罷出候節は秋冷之砌厚情に預り難有御禮申上候扨嘉穂機業の夜間、俠漢數力の兇事、鐵牛禪師の事業等の御諮問に對し拙懐の一端を開陳仕候孫而百々逢懐の念に堪へず候高野長英の御尊大人令弟たる氏又當用迄書は如何の事にや珍々く長英の脱獄後江戸、名古屋、宇和島、薩摩潜伏致され候事は渡人より實況を聞知仕候其の最後より二年前筆者方へ滞留致され候事は世上傳ふる所(共通尊大人下宿)後年迄其の儘に打過候事無之(おかし二年後年迄其の儘に打過候事無之)十月朝日新聞山下治助の事件を突き止め候もの之れ有之候先は御禮旁御尋の件々取急ぎ御答迄如斯御座候 匆々拝具

十月十日

土屋矢一

十香詩左衛門殿

当地会場の様子は御聞の件は御答の如く来る十日休暇の折下京仕候

謹啓過般御地方へ罷出
節は秋冷之砌厚情に預
有御禮申上候
夜前、侠漢勃力の逸事、鐵
牛禅師の事業等の御話仔実
面白く拝聴仕候ついで
ては萬野長英の
てたる手紙及借用
珍らく長英の脱獄後江戸、
名古屋、宇和島、潜伏
追人の事実
二年前の書面は
一昨年薄大人
後に出ずるものとて
十月朔日青山
を突き乾かたるもの
稀世の珍物と
祈感の至に
匆々拝具

不面下
牛痘師の事業等の沿革
面白く追懐
高野長英の
てたる手紙及
珍らしく長英の脱獄後江戸
名古屋、宇和島
二年前の事
（共溝大人下
後に出すものとて
十月朝日青山下
を突き乾かしたもの
稗也の行物と
所感の外
二月十日
七番
当塾
休暇の

花香茶法に郤たる書翰
及
花香家に遺せる借用證文
右書翰二通并文は
宮崎寅藏「英人全集、
宮崎長運著「三十三年之夢」
昭和十八年岩波刊」
自六二頁
至六二四頁　掲載